

二週間後、佑介、凜子、ふたりを結びつけた熊野の三人で、食事をする機会があった。

二十人も入れればいっぱいになる居酒屋で、三人は肩を寄せ合い、カウンター席でしばらく無言のまままでいた。熊野はふたりの間に座った。

この日、熊野ひとりがへらへらといろんな話をし、佑介と凜子は口を閉ざしていた。

居酒屋を出ると、熊野はじゃあなと手をあげてその場を去り、凜子は佑介とふたり、細い路地に残された。

熊野はふたりの間をとりもとうと、この夜会合を企画したのだが、結局彼の作戦は功を奏さず、熊野はくたびれた熊のように、背中を丸めて、そのそと去って行った。

「あれから、疲れてない？」

「ええ」

「お土産のうどん、ゆでてみた？」

「いいえ、まだ」

「香川にいるあいだは、ずっと天気が良かったから……」

「そうね」

佑介はいつからはじめたのか、慣れた手つきで煙草に火をつけた。煙をふうつと一息吐きだすと、

「俺たち、やり直せるかな」

佑介は自分の靴先を見ながら、言った。

凜子は肩をすくめた。

「俺たち、まだ……」

「わたしたちもう……気持ちが離れてしまったみたい」

「わたしたち？俺の気持ちはまだ離れていないけど」

「わたしの気持ちもうすっかり……」

「そうか」

凜子は、ときどきうつむいて言葉を失いながらも、最後まで気丈に振る舞い、佑介に自分から、さよならと告げた。

これ以上、あれやこれやと言い合ってもなにもはじまらない。もう凜子の心は決まっていた。

しかしなにかいったい、誰がいったい自分たちの恋を、こんな結末にしたのだろうか。

ちよつと待って、と言つて佑介が立ち去ろうとする凜子の腕をつかみ、引きとめようとしたとき、凜子は思わずその手を振り払つていた。

視線をそらし、きびすを返して歩き出す。元気で、と仕方なくつぶやく佑介の言葉から逃げるようにして、凜子は前だけを見据え、早足で歩きはじめた。

あの日、どの道を通つて、家にたどり着いたのか、凜子はまったく覚えていない。華やかな夜の街には、強がつて歩く女に目をくれるひとなど、ひとりもいなかった。

あの夜、駆け抜けた通りとは大違いだ、と凜子は、いま目の前にある静かで穏やかな、さぬきの田舎の景色に見とれる。

やつと順調に車が進みだしたとき、ふと時計を見ると、貫太と別れ、ホテルを出発してから早二時間が過ぎていた。

これからは集中しなくてはいけない。道はさらに細く複雑になつていく。

そろそろ佑介の実家に近づいているはずだったが、新しい家やスーパーマーケットが建ち並び、

凜子の記憶の邪魔をした。

「たしかこのへんに、たばこ屋さんがあったはずだけど」

「牛を飼っている家は、もう少し先だったかしら」

迷うことが恐くて、凜子はそれを紛らわすために、いちいち思ったことを口にした。

佑介の実家まであと十分、というところまでたどり着いたときだった。

凜子は急に息がつまりそうになり、のどの奥に苦しさを感じた。ついには咳が止まらなくなり、ジュースの自動販売機がある空き地に車を止めると、一目散に駆けだした。

凜子を囲む三六〇度の風景が、忘れかけていたちいさな思い出のかけらを運んでくる。佑介らしい心遣いや優しさ、軽々しく自分が発した別れのことばが脳裏をよぎる。

凜子は自販機の前に立つと、バッグから財布を取り出し、小銭をさがす。百円玉は一枚もなく、十円玉をかき集めてコインの投入口に入れようと

した。

「ジュース、ジュース」

そのとき、後ろからこどもの声がして凜子はふりかえる。数えたはずの十円玉が一枚足りず、凜子は財布を左右にゆすつていた。

三歳くらいのちいさな男の子が、凜子の真横にやってくる。

「ねえ、ぼくが押してあげようか？」

妙に人なつっこいのが田舎の子の特徴だ。

「ありがとう。でも、おばちゃんね、いまお金を探しているの。十円玉が一枚足りないの」

自分のことを、おばちゃんというか、おねえちやんというか、凜子は短時間の間にかなり悩んだ。やっと財布から目を離し、男の子を見る。

額には珠の汗をかき、靴の先で地面を蹴っている。凜子は、順番を待つちいさなお客のためにも、早く買わなくては、と焦る。そのとき、手をすべらせ、コインが二枚ほど地面に転がった。

男の子が急いでかがみこむ。

「あつ、見つけた」

男の子が十円玉を一枚、拾い上げる。

凜子も腰を屈め、転がるもう一枚を追いかける。地面に膝をついたとき、凜子の目に、男の子の白いスニーカーに書かれた文字が飛び込んできた。

おがた かいと。

凜子はこどもをじつくりと見つめた。十円玉をつまみあげる指先が小刻みに震えた。

一瞬の間に、凜子はすべてを把握することができた。

五年もたっているのだ。

佑介にこどもがいたって不思議ではない。

以前、このあたりで緒方という姓は珍しく、佑介の家族や親せきを除けば、ほかにないと聞いたことがある。それになにより、彼は佑介と瓜二つだった。

無駄な前置きをせずにとだ、パパは元気？と聞きたくなった。

それにしても、目の前の男の子は、ほんとうに佑介のこどもなのか。凜子の頭は一瞬混乱した。

つむじの位置が佑介と同じだった。耳の形が、怖気づくことなくまっすぐに見つめる瞳が、瞬きをするとき、二度パチパチと目を閉じるしぐさ

まで、彼と同じだった。

心臓の鼓動がはげしく打った。

後ろから男の子を追いかけ、走り寄ってくるおなかの大きな女性がいた。母親らしきその人は「待ってカイトくん」と言っ、笑みを浮かべながらこちらに向かってくる。

母親がこどものそばにいくと、凜子は目を伏せたまま「お先にどうぞ」と言っ、親子にさきを譲った。

「私たちは急ぎませんから」

「いいえ、いまお金を出しているところですから、お先にどうぞ」

ありがとうございます、と言っ、満面に笑みを浮かべると、母親の頬に大きなえくぼができた。

彼女は男の子の肩を両手でつかみ、自販機の前に立たせた。母親がお金を入れはじめると、待っていました、と言わんばかりに男の子は「ぼくが押す、ぼくが押す」と言っ、ぴよんぴよんと飛びあがり、両手を青空にかかげた。

「どれにする？」

「ぼくが押す」

「だからどれがいいの？」

「青いやつ」

男の子は一番上の段の、左から二番目の缶を指さした。その青い缶にはこどもの好きそうなアニメのキャラクターが描かれていた。

凜子の胸の中で、早くここを立ち去らなければ、と焦る気持ちと、彼らの様子をもう少し眺めていたい、という思いが交錯する。

目の前の親子の正体を知り、もはやジュースなど買わずにすぐにも車に乗り込みたいと思う一方で、自分が席を譲った女と、佑介のちいさなコピーのような少年を、あと少しだけ眺めていたかった。

「ああ、届かないよ」

男の子が見上げたのは、おなかの大きな母親ではなく、凜子だった。

凜子は黙って、こどもを後ろから抱きあげ

た。凜子の肌に触れたちいさな膝は冷たく、細い首は温かかった。

(以上7月11日放送分)